

2025年度青山学院大学一般選抜(個別学部日程)

文学部フランス文学科 B方式

総合問題

【出題意図】

本文においては、「レトリック」という言語芸術の定義に始まって、その歴史的な変遷と具体的な用例、現代レトリックの特徴とその可能性について述べられている。この論旨を正確に理解する読解力、そして要旨を踏まえたうえで、身の回りにある「レトリック」について限られた時間内に適切な用例を探し、論を組み立てる構成力を問うた。

問一では、文脈に即して選択肢から適切な語句を選びとり、漢字で正確に記すという基礎的な日本語力が問われている。

問二では、日常生活ではなじみのない「撞着語法」を、ことわざ・成句表現から探す。本文中の「小さな大投手」などをヒントに、「急がば回れ」、「負けるが価値」など、慣れ親しんではいるがじつは撞着語法の実例である表現を、適切に挙げられるかを問うた。なお、撞着語法を使った慣用表現は意外に数多くあり、それに気づくことができるかが重要である。

問三では、「時は金なり」というメタファーの成立経緯について、本文で述べられた箇所を簡潔にまとめ、なおかつ「ことばがいかに可塑的なものでありうるか」を指摘することが求められている。

問四では、まず全体の論旨を正確に理解したうえで、さらに現代に生きるわれわれが継承しているレトリック、あるいは現代に新しく生まれたレトリックについて、適切な具体例を最低でもひとつ、ないし複数挙げる思考力と表現力が問われている。そして、われわれが日常においてなにげなく使っていることばの意味は、完全に固定したものではなく、歴史的・社会的背景に応じて、またほかの語との関係において、柔軟に拡大したり変化したりする可能性を秘めていることを、説得的に論証できることが求められる。

これらの論点は、まさにフランス語という外国語を習得し、フランスの言語文化・哲学思想・文学そして芸術を学ぶことを目指すフランス文学科の教育の根幹にある問題意識だ。